

序

千葉大学長
磯野可一

千葉大学は、昭和24年5月31日をもって新製の国立総合大学としての第一歩を踏み出し、今年で50周年を迎える。

新制大学は、旧制の高等教育諸機関をすべて単一の4年制の大学として再編し、学校体系の民主化、一元化の原則を貫くために発足したものである。

その目的は、学校教育法によると、「大学は学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び、応用的能力を展開させるものである。」と述べられている。

また、新制大学の理念としては「一般的、人間的教養の基盤の上に、学問研究と職業人育成を一体化しようとするものである。」とされている。

そして、新制国立大学の設置に当たっては、一府県一大学の方針が貫かれた。

このようにして、千葉県に唯一の新制国立総合大学として千葉大学が誕生したのである。そして、その路線をひたすら歩み続けてきた。

今私達が目の当たりにする千葉大学のキャンパスは、半世紀に亘る先人の並々ならぬ努力の賜物である。美しい緑を織り成すキャンパスの樹木は、その堂々たる雄姿に、風にそよぎざわめく葉音に、過去の思い出を限りなく語りかけているように思える。

私が第11代の学長となり、ここに千葉大学50周年という節目の時を迎え、11月には記念式典を挙行することは身に余る光栄であると同時に大きな責任を感じている。

総合大学としての創立30周年記念式典は、第7代の香月秀雄学長により記念事業の一環として行われた。

その後「焦らず、急がず、止まることなしに千葉大学を大学たらしめる為の着実な歩み」(『千葉大学三十年史』序)をわれわれは続けてきた。そして、20年の歳月が流れ、今、50周年を迎えることとなり、これを機に20年をまとめたの大学史が編纂された。

その中には、学部、大学院研究科、センターの新增設、そして、組織改革など、苦

難の末に生み出された足跡が綴られている。

止まることなき時の流れは、今、新しい世紀を迎えようとしている。

その流れの中で先人の努力によって、爆発的に発展をとげた20世紀の科学・技術・情報化は、人間社会に多くの福音をもたらすと同時に、反面、数々の大きな負の面をも招来したといえる。

このような時期に、日本はバブルの崩壊により、経済破綻を来たし、社会は混乱に陥っているかの印象をも与えている。

このような世相を背景にして、今、教育界にあっても、その責任の重さを痛感し、高等教育機関として、社会に貢献すべき方策を自ら考え、施行するための努力に最善を尽くしている所である。平成の改革ともいえるものである。

このような大きな教育改革は、歴史をたどってみると明治の学制改革と敗戦後の昭和の改革がある。

近くは、昭和の改革を調べてみると、それは真に、抜本的改革といえるものであった。

敗戦後の日本に於いて、今後日本国民をどのようにして教育してゆくのか、どのような日本と国民をつくるのか、真の教育とは如何にあるべきかが問われ、激しい論議の末に、教育の基準が生まれたと聞く。単に米国制度の模倣ではなく、日本国民に適した、日本独自のものを創造するために、教育の根幹を見直し、国際社会に役立つ人材育成のための教育改革であった。

しかし、時代の変化とともに、昭和から平成にかけて、これまでも度重なる改革が行われ、現代社会への対応が進められ、そして、多くの逸材を世に送り出した。

とはいえ、急変、激動の社会の変化にあっては、その進歩の足跡も遅々たるものと感ぜざるを得ない。

しかし、教育の改革は、拙速であってはならず、中・長期的計画のもとに立案されなければならない。

21世紀を前に現在行われんとしている一大改革の根底には、真の教育の概念よりも、経済改革がより大きな比重を占めている点に憂慮せざるを得ない。

このような中であって、昨年10月に示された大学審議会の答申は、高等教育改革の基本ともなるものである。

そこには、以下4つの基本理念が示されている。それは、

- 1．課題研究能力の育成。
- 2．教育研究システムの柔構造化。

- 3．責任ある意思決定と実行。
- 4．多元的な評価システムの確立。

である。

この答申は、多くの批判はあるにしても、高等教育を今後進めてゆくべき方向を示唆しているといえる。

この方向性を視野に入れながら、各大学は独自の改革を行わなければならない。その時に当たり、我々は今一度、クラーク・カーが『アメリカ高等教育試練の時代（1990～2010年）』（1998年、玉川大学出版部刊）の中で指摘する問題点を思い起こす必要がある。

- 1．政府からの財源の獲得がますます困難となる。
- 2．高等教育機関が国家及び産業部門に組み入れられるにつれ知的独立が失われつつある。
- 3．政府の姿勢は、項目ごとの統制よりも、全般的な誘導へと変化している。高等教育はますます市場経済化へと進む。
- 4．政府は「純粋学術」から応用研究や研究の応用、技術訓練の方向に高等教育を誘導している。

などの12の項目である。

このような変革の時期に於いて、千葉大学の50年史を編纂し、その歴史を考察することには大きな意味がある。

過去の歴史を振り返ることは、単に過去を懐かしむことではない。過去の歴史から、真に重要なものを求め、その土台の上に新しいものを築くことが必要なのである。

すべて過去のものを古きものとして捨て去り、新しい制度を外国に求め、取り入れることは、日本独自の進歩には繋がらない。

自己中心主義に陥らず、組織の重要性、即ち社会全体、国全体、そして世界を見据えた考えが必要である。

これまでの大学は、大学の自治のもと、学問の自由と真理の探究の精神によって、国の行財政に関する改革によって直截的影響を受けてはならないとしてきた。この“大学の在り方”は、今や大きく変わろうとしている。

独立行政法人化の問題まで急浮上しているのが現状である。教育の根幹を揺るがす改革は、国家百年の大計を念頭において展開されなければならない。

大学に求められる不易の部分を見つめ、自らの責任に於いて、教育・研究の改善と

向上を図り、明日に向かって育ちゆく有為の人材を育て、真理を求め、社会に、そして人類の幸せのために、大きく貢献するために尽力することを誓おうではないか。

最後に、千葉大学が総合大学としての50周年記念事業に御尽力いただいた全学の教職員並びに学外協力者の方々に、この場をお借りして深甚なる謝意を表す。

特に、この50年史の編纂に直接携われた山口正恆、土屋俊教授を始めとする各部局選出委員、また、通史編集専門部会でご尽力いただいた下村由一名誉教授を始めとする各専門委員、さらにこれらの方々に支援した事務局職員の並々ならぬ御苦労と御努力に心から感謝申し上げます。

如何に時代が移り、世の中が変わろうとも、その時代に於いて、真の教育を求め、誠心誠意最善を尽した我々の努力はいつまでも語り継がれ、そしてその精神は受け継がれるものと信じる。

千葉大学の更なる発展を期するとともに、新たなる50年に向けて、堂々の歩みを進めてゆきたい。